

文化課からのお知らせ

次回展示は… 夏の企画展「**知っておどろき！大黒屋光太夫！！**」

7月15日（木）から開催します

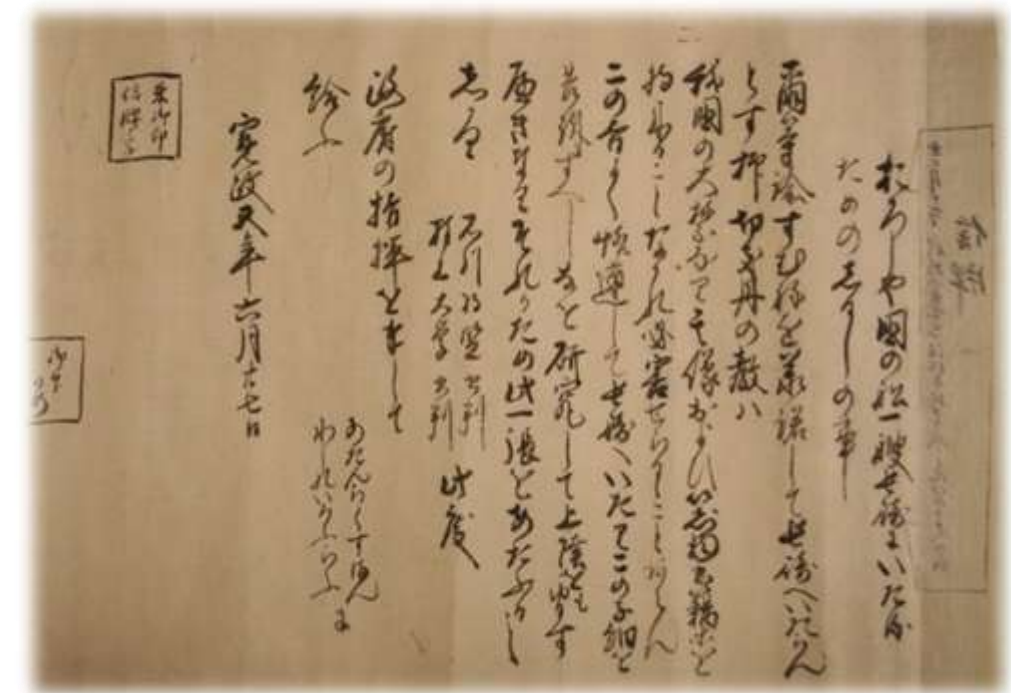
夏休みにむけて小中学生にも大黒屋光太夫について知ってもらうための展示です。恒例の「こうだゆうくんクイズ」も登場します。正解した人には、こうだゆうくんシールをプレゼントします！夏休みの宿題や自由研究にも役立ててください。ご来館をお待ちしています。

大黒屋光太夫記念館は、鈴鹿市文化振興部文化課が所管する資料館です

以下の所管資料館も併せて是非ご来館ください。

- ・佐佐木信綱記念館（鈴鹿市石薬師 1707-3 Tel.059-374-3140）
- ・伊勢型紙資料館（鈴鹿市白子本町 21-30 Tel.059-368-0240）
- ・庄野宿資料館（鈴鹿市庄野町 21-8 Tel.059-370-2555）
- ・稲生民俗資料館（鈴鹿市稲生西 2-24-28 Tel.059-386-4198）

各館のパンフレットは受付で配布しています。



大黒屋光太夫らの帰郷文書より ラクスマンの信牌写

展覧会の紹介

「伊勢の染型紙 - 映像と実物にみる匠の技 -」

場所：国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 電話：06-6876-2151（代表）

期間：2010年3月25日（木）～6月29日（火）

鈴鹿市の白子・寺家で生産されてきた伊勢型紙をビデオ映像や江戸時代・現代の型紙、キモノ・布地などで紹介していただきます。鈴鹿市・伊勢型紙技術保存会からも資料を貸出しています。

編集後記

今年も春がきました。新しい年度の始まりに気持ちを新たにされている方も多いのではないのでしょうか。

今回展示している「大黒屋光太夫らの帰郷文書」の舞台も春でした。

光太夫は、1802年4月22日に亀山に到着し、翌日、村役人とともに若松村に帰ります。旧暦の4月なので桜はもう終わっていましたが、晩春の故郷に光太夫は帰ってきたのです。春の光の中で、20年ぶりに再会した郷里の人びと、そして家族。光太夫や周囲の人々の感動はいかばかりだったのでしょうか。

そして、光太夫は、伊勢神宮やその周辺の寺社を廻り、6月3日には江戸へと出発します。その後、光太夫が故郷の土を踏むことはありませんでした。この別れも特別な思いであったと思われます。

春は出会いと別れの季節ですが、光太夫にとって1802年の春は、特別な出会いと別れの春でした。

大黒屋光太夫記念館で、鈴鹿市指定文化財である「大黒屋光太夫らの帰郷文書」をご覧になって、208年前の春に思いをはせていただければ幸いです。

平成22年 春の企画展 光太夫のさとがえり

大黒屋光太夫は、帰国後、江戸で幽閉され、むやみに外国のことを口外しないよう厳しい管理下に置かれたとされています。しかし、実際には、帰国から10年後に故郷鈴鹿への帰郷が許されています。また、江戸で多くの蘭学者や文人たちと交流し、海外の情報を伝えたこともわかっています。

今回展示する帰郷文書は、昭和62年に発見され話題を呼んだ古文書群です。幽閉されたと言われていた光太夫ですが、この古文書の発見によって、実際は里帰りを許されていたことがわかりました。そして、この発見は、光太夫の江戸での処遇を見直す契機となりました。

編集・発行：鈴鹿市文化振興部 文化課 Tel.059-382-9031

大黒屋光太夫記念館

Tel & FAX 059-385-3797

帰郷文書と関連資料からわかる小市の遺品の展覧会

小市の遺品は、現在展示中の帰郷文書により、 どういう経緯で鈴鹿に返され、 どのように地元で利用されたのか知ることができます。

帰郷文書によると、小市の遺品は、寛政6(1794)年9月に幕府より亀山藩に送られ、亀山の太田権四郎によって封印されて、若松の大庄屋・加藤要助へ引き渡されました。

小市の遺品を受け取った村では、小市の追善供養を行うことを計画し、同時に遺品を村人に公開することの許可も亀山藩に取っています。その遺品公開が好評だったのか、その後、小市の遺品は、小市の追善供養と言う名目で各地に貸し出されるようになります。そして、やがて村では、小市の妻・けんへの心付けと銘打って、高額な遺品の貸出料までとるようになるのです。もちろん、遺品の展覧会の入場料も“香料”などという名目で徴収しています。それでも、遺品の貸出しを希望する寺は少なくなかったようで、その貸出しをめぐる紛争まで起きました。ロシア渡りの珍しい器物が、当時の人の興味の対象になったことがよくわかります。

その小市の遺品の披露の様子は、帰郷文書以外にも様々な史料に出てきます。

光太夫が享和二年に帰郷した時に、若松村の肝煎として光太夫の世話にあたった中川喜右衛門の旧蔵で、その後深田神社に伝わった「漂流船実録(鈴鹿市蔵)」は、地元で編まれた漂流記ですが、その中にも小市の遺品の披露について触れている部分があります。要約すると、次の通りです。

「小市は幸せ者だ。途中で亡くなったのは不幸のようだが、その遺品は幕府から亀山藩に言い渡されて故郷の妻に下されし、白銀十枚まで賜った。その上、遺品は、一身田の御門主までご高覧になり、御手ずから焼香までしてくださいました。若松では、亀山藩からご指図を受けて、菩提寺である宝祥寺で七昼夜の大法会を執行し、小市追善のために遺品を披露した。それを見に来る群集は、数え切れないほどで、古来より若松にこれほど人が押し寄せたという話は聞いたことがない。皆小市らの石碑の前で涙し、読経の声は磯打つ波のようであった。」

小市の遺品の披露は、若松だけにとどまらず、津・四日市・名古屋・京都などでも行われました。名古屋での披露の様子は、「猿猴菴合集(紙の博物館蔵)」に絵入りで詳しく紹介されています。また、京都で披露されたときの出品目録は「阿羅紗国衣服器物目録(鈴鹿市蔵)」では、五十三点の遺品が出品されたことがわかります。

展示資料の紹介

『北海異談』 文化4(1807)年 南豊亭栄助著

文化年間に大坂で成立した講釈です。ロシアが蝦夷地(北海道)を侵略し、函館沖で日本とロシアの海戦が勃発し、日本が勝利するという創作の内容です。物語は、光太夫の漂流やラクスマンの来航から始まり、レザノフの来航などの史実からも題材を多く取っています。このなかに、光太夫の里がえりについても触れられています。作者の講釈師・南豊亭栄助たちは、偽りの内容を流布し世間を騒がせことで、江戸に送られ、獄門(さらし首)に処せられました。

「幸太夫は軽き者なりといえども、上聞に達し候ものなれば、一通り言上を遂げずんば有るべからずと、則ち、將軍家へ仰せ上げられる處、忝(かたじけな)くも御免を蒙り、在所へ遣わし然るべくと仰せ付けられ候なり。これにより、一通り紀州へもご案内に及ばれ、其の上、公儀よりも御小人目付、ならびに御小人付添ひて勢州の故郷へ遣されける。もっとも御役人方の思し召しをもって、伊勢参宮苦しからずとの御内意にてやふやふと罷り登りける。幸太夫、ありがたき旨厚くお礼申し、静かに勢州さして登りけるに、思ひよらざる帰郷なれば、所のもの酒肴を携え、途中迄出迎え、親方白子与太夫よりも人を出し、是を迎えけるとかや。実や錦を飾る諺にて、色々と取沙汰しける。在所にて暫く逗留の内所縁近付よりも日々呼び寄せ、色々馳走などにて毎日毎日なり。此節彼国より持来りし色々の品大かた夫々にわけ遣わしけると也。其内にはヲロシア王の装束一重、親かた白子与太夫へ遣したり。それより伊勢両宮へ参詣して余り長逗留も付添いの衆へ無礼とて程なく帰府致しける。」



【意訳】～創作の物語なので、史実と異なる部分もあります～

光太夫は身分が軽いといっても將軍様にお目見えした者なので、念のため幕府にお伺いしたところ、ありがたくも里帰りをお許しいただいた。そのため、紀州藩へも連絡され、幕府からは役人が付き添って故郷の伊勢に派遣された。伊勢参宮も許され意気揚々の里帰りだった。光太夫の里帰りは思いもよらないものだったので、故郷の人びとは酒肴を携えて途中まで出迎えにきた。船主の一見勘右衛門からの使いも出迎えたそうだ。故郷に錦を飾るといふ諺のように、故郷で滞在の間は、毎日毎日、親類縁者らに呼ばれご馳走され、ひっきりなしだった。ロシアから持ち帰った品々の多くは分け与えたそうだ。その中でもロシア王から頂いた装束は、一見勘右衛門へ差上げた。そして、伊勢両宮に参詣して、あまり長い間滞在するのにも付き添いの役人たちに無礼であるとして、ほどなく江戸へ帰った。

事業報告

＊第5回特別展「桂川甫周没後200年記念 西洋に知られた日本人 - 甫周と光太夫 -」

▼入館者数 1248人

開館日数33日 開館時間10:00～16:00 平均32人/日

▼出版物 第5回特別展「桂川甫周没後200年記念 西洋に知られた日本人 - 甫周と光太夫 -」図録

▼主な来館者(敬称略) 津市橋北公民館 若松小学校5年生・6年生 郷土史研究会など

教えて!こうたゆうくん!!第5回



～このコーナーでは記念館や文化課に寄せられた問い合わせをご紹介します～

Q. 東京の回向院で船形の供養碑をお参りして参りました。慰霊碑の表面には何故光太夫の名前が刻まれていないのでしょうか。背面は「勢州白子 俗名光太夫 同水主中霊」、「三州高浜 弥兵衛船 乗組中霊」と一括して記入されていました。何らかの事情があって、後から刻まれたのでしょうか。光太夫の帰国前に建立されたようですが一体だれが建立したのでしょうか。

A. 回向院の船形供養碑ですが、寛政元年(1789)に大島で遭難した三河の彦兵衛船の供養が表面に刻まれ、裏面に光太夫らの供養の文言と、天明2年(1782)に遠州灘で遭難した弥兵衛船の供養の文言が刻まれています。この3つの廻船は松阪の長谷川家の船荷を積んでいたことが共通点ですので、供養碑の施主はおそらく長谷川家と思われます。

長谷川家は、光太夫らが遭難して3回忌にあたる天明4年(1793)には、鈴鹿市の現若松東墓地に供養碑(鈴鹿市指定文化財・大黒屋光太夫供養碑)をすでに建てています。そのため、回向院の船形供養碑は、光太夫らを弔うのが主な目的ではなく、あくまで彦兵衛船の供養が主だったと思います。そのため、光太夫らの供養の文言は、背面にまとめて刻まれたと考えられます。

また、船形供養碑の建立の時期については、彦兵衛船の遭難から光太夫が帰国するまでに建てられたはずですので、彦兵衛船の三回忌にあたる寛政3年(1792)に建てられたと推測されています。

ところで、回向院には沢山の海難供養碑があります。その中に、光太夫の名がみえる供養碑はもう1基あります。そちらは徳本上人の六字名号が刻まれており、施主は大伝馬町太物問屋仲間です。文化11年(1814)5月におこった角屋重助船の遭難事件をきっかけに建立された供養碑ですが、過去の大伝馬町組関係の海難遭難事件についても一緒に供養されているのです。このように、他の遭難事件がきっかけで別の海難事故の犠牲者を追善する事は珍しいことではありませんでした。



回向院の海難供養碑

回向院: 東京都墨田区両国 2-8-10 JR両国駅、地下鉄大江戸線両国駅 徒歩3～5分